城西国際大学紀要　第30巻　第２号　2022年３月　67-84

〈研究・調査報告〉

オンライン英語授業における学習効果と問題点の実態調査と分析
―スピーキングクラスを受講する大学２、3、４年生を対象に―

渡　邉　治　郎

【要旨】

近年、オンライン授業の導入により、英語教育の授業形態は大きな変革が求められている。本稿では、2020 年秋学期に行われたオンライン英語授業のスピーキングクラスで、対面授業と比較した学習効果と問題点に関する実態調査を行った。調査では、大学 2、3、4 年生を対象にアンケート調査を実施し、オンライン授業におけるメリットとデメリットの見解をまとめた。その結果、(1) オンライン授業の希望実施率、(2) ブレークアウトセッションの有効性、(3) 学習効果、(4) リスニングスキルの向上、(5) インターネット接続問題、(6) コミュニケーション不足の問題、(7) 課題の量の問題などが明確になった。

本研究の目的は、オンライン授業におけるスピーキングクラスの学生の見解を実態調査し、調査結果から明らかになったことを踏まえ、今後の大学におけるオンライン英語授業のあり方について考察するものである。

キーワード：オンライン授業、非対面授業、実態調査、アンケート調査、学習効果

１．目的と研究背景

世界中で拡大した Coronavirus Disease 2019 (COVID-19) の影響により、2020 年前期から多くの大学が対面授業からオンライン授業に移行した。文部科学省の調査によると、2020 年 5 月 20 日時点では日本国内 890 校中約 9 割にあたる 778 校の大学が遠隔授業に移行した（文部科学省 2020)。急速に授業形態が変化する状況下で、対面授業と同等の学習効果がオンライン授業でも求められている。こうした状況の中、オンライン英語授業は、対面授業と比較してどの程度の効果があるのか、どのような問題に直面しているのか、そして学生は実際にオンライン英語授業を受講しどのように感じているのか調査することは、今後の授業形態や授業内容を考える上で大変意義のあることだと感じる。

そこで本研究の目的としては、2020 年秋学期に開講したオンライン英語授業のスピーキングクラスを受講した大学 2、3、4 年生 62 名を対象に授業に関するアンケート調査を行い、(1) オンライン授業を行う頻度はどの程度が望ましいか明確にし (2) 対面授業と比較した学

習効果を調査し（3）どのような問題点があるのかを明らかにした。この 3 点を検討することで、現在考えられる将来の展望について考察し、今後のオンライン英語授業の向上に役立てたい。

次章ではまず、オンライン授業の現状をこの 3 点の視点から考察する。次にアンケート調査の結果を示すことで今後の改善点を考察する。最後に、今後のオンライン英語授業のあり方について、将来の可能性と展望を述べる。

２．先行研究

近年、オンライン授業に関するさまざまな研究が行われており、オンライン授業の効果や問題点について言及している研究は、COVID-19 以前から進められている。教育機関では、どのようにしてオンライン授業でも対面と同様の学習内容を提供することができるかが課題となっている。アメリカ教育省によると、1996 年から 2008 年にかけて行われたオンライン学習に関する研究文献 1000 以上の実証研究の中からメタ分析を行い、対面指導とオンライン学習の効果を比較している。その結果、対面指導よりオンライン学習を受けた生徒の方が平均的に強い学習効果があったと報告している。さらに対面指導のみ、もしくはオンライン学習のみのどちらかだけ行うよりも、この 2 つを組み合わせた方がより学習効果が大きかったと述べている。2 つの授業形態をバランス良く組み合わせることで効率性と柔軟性が生まれている。そしてオンライン学習方法としては、オンディマンドのような形態で学生が一人で学習するより、インストラクター主導もしくは協働指導者のもとで学習をした方が学習効果は大きかったと報告している（U.S. Department of Education 2010）。さらに、オンライン授業によるメリットは、1 クラスの生徒数が大人数であっても当てはまる内容が報告されている。大学では、科目の種類により 1 クラス内の生徒数は、少人数から大人数とさまざまだが、大人数クラスをオンライン授業にすることで、学生にとってさまざまなメリットがあると述べている。例えば大人数クラスの場合、実際の教室で授業を受けるよりオンライン授業を受ける方が、教師が黒板に書く文字が見やすくなるし声が聞きやすいというメリットがある。学生は講義資料をデジタル化されたもので受け取ることができるので管理が楽になり、授業内容についても後ほど録画を見ながら復習ができる。これは、COVID-19 収束後でも十分に活用できることであり、そのような学生からの要望もあると述べている（田浦他 2020）。その他、自宅や外出先など自分の選んだ場所で授業を受けられることや、他人を意識することなく自分のペースで学習できることもオンライン授業のメリットとして報告されている（文部科学省 2021）。オンライン授業のような直接学生同士や先生と会えない遠隔操作による交流は、COVID-19 感染予防になることやクラスで話すことに対する緊張度が減り自分のアイデアを発表することに自信が持てるという利点も生み出している（Mahmoud & Mohammad 2021）。

学習効果が得られる反面、問題点も指摘されている。その中でも精神的な負担から発生する問題は、様々な国から調査が報告されている。スペインの大学で学生や職員に対して行われた COVID-19 による精神的影響の調査では、調査に参加した学生の半数以上がオンライン授業により、中程度から重度の不安、抑うつ、ストレスに対する影響があったと報告している（Odriozola-González, Planchuelo-Gómez, Irurtia & De Luis-García 2020）。中国の大学では、医学部の学生に COVID-19 による精神的影響を調査した。その結果、急激なオンライン授業への移行により、学生の 24.9％が軽度から重度の不安を感じていることが明らかになった。特に経済的影響、日常生活への影響、および学業活動の遅れなどに不安症状との関連があることを示していた（Zhang, Wang, Yang & Wang 2020）。フィリピンでは、COVID-19 パンデミックの初期段階となる 2020 年 3 月に精神的影響の調査を行った。その結果、調査対象者 1879 人中、4 分の 1 が中等度から重度の不安を報告し、6 分の 1 が中等度から重度のうつ病と心理的影響を報告している（Tee et al. 2020）。ヨルダンの首都アンマン近郊の大学では、2020 年 3 月からスタートしたオンライン学習に関する調査が行われた。その結果、学生がオンライン授業に移行する際にメンタルヘルスの問題、集中力の低下、自己管理の問題が生じたため、調査対象の学生の 3 分の 1 以上がオンライン学習体験に不満を持っている事が報告されている（Mahmoud & Mohammad 2021）。対面授業では、学校内で友人や先生と会うことで自然にコミュニケーションをとることができたが、オンライン授業のみの場合は大学に通えず人との交流が限られるため、孤立感による不安が生じる可能性も指摘されている。Gillett-Swan（2017）によると、学生が一人で学習することにより、孤立感が高まり、学習の妨げになる事が報告されている。そして学生は、オンライン授業の影響によりさまざまな問題や不安を抱えているが、これらの問題に対してどのように対処するかを知ることは、学習効果に影響する要素である。石川・向後（2017）は、オンライン大学で学生が問題に直面した場合にどのように対処するか調査を行ったところ、相談できる学友やメンターとの交流があることが重要で、学習の相談ができる相手がいない学生は、援助を要請しない傾向があると報告している。対面授業では、起こらなかった精神的ストレスが学生の負担になることを考えると、学生の立場からすればオンライン授業より対面授業を望んでいることは常識的に推測できる。ただ今回のオンライン授業への移行に関しては、状況的に自然にオンライン授業へ移行したのではなく COVID-19 による感染リスクを防ぐためにやむなく移行したという理由がある。この感染リスクを考慮した上でオンライン授業への移行を迫られた場合、学生が対面授業とオンライン授業のどちらの授業形態を望んでいるかや、授業に対する満足度なども現状を知る上で重要な要素になる。Patricia（2020）によると、270 人の学生に調査を行った結果、学生の態度、動機付け、自己効力感、およびテクノロジーの使用が、学生の認知的従事や学業成績に重要な役割を果たしており、学生はオンライン学習より対面学習を好む傾向があると報告している。学生は、オンライン授業の利点は理解しているが、オンライン授業への移行により不快な経験をしたり、学習に対して否定的な態度を示したことをレポートしている。そ

の他、COVID-19 の感染リスクが対面授業の実施を希望する割合に影響している事も報告されている。Rizun & Strzelecki（2020）によると、多くの学生がオンライン授業の効果を実感しているが、感染リスクがなくなれば対面授業に戻りたいという結果が報告されている。また、Dafydd & Hyoungjoo（2021）によると、感染リスクがある場合は授業形態を組み合わせたブレンド型学習（BL）が学生に好まれるが、リスクがなければ対面授業のみが好まれる傾向がある。理由としては、BL では教師との交流、グループワーク、テクニカルな質問をするときに限界があるからだと報告している。このように、学生は感染リスクがなくなると多くが対面授業に戻りたいという見解を示していることがわかる。しかし、先行研究では、科目内容や対象年齢がさまざまで、大学 2、3、4 年生を対象にしたオンライン英語授業のスピーキングクラスに関する実態調査は非常に限られているのが現状である。そこで、本研究ではこれらのポイントに着目し、大学 2、3、4 年生の英語オンライン授業に関して、大学や学生が抱える課題や問題点そして今後の展望について述べる。

３．調査内容

本章では、調査対象者、調査方法、データ分析の 3 つの項目に分けて解説する。また、アンケート調査に使用した 11 の質問を表にまとめた（表 1 参照）。

３．１　調査対象者

アンケート調査を依頼した対象者は、城西国際大学 2、3、4 年生合計 62 名である。学生は 2020 年秋学期に開講した学科共通科目群I「Oral Fluency II」を受講した経営情報学部、メディア学部生である。学科共通科目群I「Oral Fluency II」は、グローバルに展開するビジネスなどに必要な英語スピーキング力を身に付けることを目的とした科目である。

３．２　調査方法

対象者である 2020 年秋学期学科共通科目群I「Oral Fluency II」をオンラインで受講した 3 クラス計 80 人の学生に任意でアンケート調査を授業最終日に依頼した。オンライン授業とは、インターネットを通した Web 会議システムを利用して、双方向でライブに実施する同時双方型授業である。システムは、全て Cisco Webex Meetings が使用された。アンケート調査の内容は、学内ポータルサイト Manaba にマイクロソフト（MS）Word ファイルで掲示したものを、各自学生にダウンロードしてもらい、回答を MS Word ファイルに記入後、メールに添付して返信してもらった。調査対象者には、アンケート調査を実施する前に、アンケートの最後に提示してある「アンケート調査同意書」を説明した上で署名を依頼し、アンケートと一緒に返信してもらった。質問項目作成にあたっては、関・冨永・向後（2014）、石川・向後（2017）、早稲田大学（2020）を参考にした。アンケートの質問項目は合計 11 項目あり、項目

1、2、9、10、11 は 5 段階評価を導入した。項目 3、4、5 は 3 段階評価と回答理由を説明する自由記述を採用した。項目 6、7、8 は自由記述を取り入れた。3、5 段階評価を導入した理由は、Q10 以外は度合いを表す回答なため、学生の感覚により近い回答をあらかじめ用意して選んでもらった。Q10 に関しては、石川・向後 (2017)を参考にした。自由記述を採用した理由は、回答内容に幅があり、3、5 段階評価では絞り込めない回答内容を、より具体的に説明してもらうためである。

アンケートの回答は、2021 年 1 月 25 日から 2 月 11 日の間に実施し、全クラス 80 人中 62 人から回答を回収した。アンケートの回収率は、全体の 69%であった。

表 1. オンライン英語授業におけるアンケート調査の質問項目

1	感染症リスクがある場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？
2	感染症リスクがなくなった場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？
3	オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて学習効果はありましたか？
4	オンライン英語授業には、満足していますか？
5	オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はありましたか？
6	オンライン英語授業を受ける上で、困難と感じた点はどのようなことですか？どのように困難を乗り越えますか？
7	オンライン英語授業を続けられる理由はどんな点にありますか？
8	オンライン英語授業の良い点と改善点を述べて下さい。
9	オンラインで英語を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはありますか？
10	オンライン授業でわからないことがあるとき、あなたはどうしますか？
11	各項目から、最も当てはまるものを一つ選んでください。

	まったくそう思わない	ややそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	強くそう思う
オンライン授業により、英語を話す力が伸びた。					
オンライン授業により、英語を聞く力が伸びた。					
オンライン授業により、英語の文法力が伸びた。					
オンライン授業により、英語の語彙（単語の数）が増えた。					
オンライン授業により、英語の発音が良くなった。					

（出典　関・冨永・向後（2014）、石川・向後（2017）、早稲田大学（2020）をもとに筆者作成）

３．３　データ分析

学生のオンライン英語授業に関するアンケート調査 Q1、2、3、4、5、9、10、11 では、3、5 段階評価の回答を分析した。これらは、まず全学生の回答一つ一つに目を通し質問の各選択項目に該当する回答を抽出し統計を出した。その後、統計を MS Word ファイル上に表でまとめた（表 2、3、4、5、8、9、11、12）。

Q6、7、8 に関しては、自由記述回答を分析し、統計を MS Word ファイル上に表でまとめた（表 6、7、10）。回答の傾向や特徴を明確にするために使用した記述式回答には、Iida（2012）、飯田他（2019）のコーディングシステムを参考に分析が実施された。コーディングシステムを用いた分析方法は、次の 4 つのレベルで行われた。

A. データ準備

最初の段階では、Q6、7、8 の全自由記述回答を抽出して質問順に MS Word ファイル上に整理した。その次に、記述式回答を抽出して、各質問別に整理した。

B. データ分析

初期段階の分析では、全回答の内容を詳しく読み、どのような共通点があるかを把握した。このプロセスでは、キーワードとなる言葉や意味を探し出し、共通点がある回答別に整理することで、暫定的なコーディングシステムを作成することが目的である。

C. コーディングシステムの構築

この段階では、データ分析で作成した暫定的なコーディングシステムを使用して、再度回答内容を一つ一つ確認し、共通点をより明確にした。このプロセスを繰り返し、回答を選別すことで、分析に使用するコーディングシステムを作成した。

D. パターン分析

最終段階では、作成されたコーディングシステムを使用して、回答内容のパターンを分析して、どのような傾向があるかを整理し、表にした（表 6、7、10）。

４．結　果

本章では、まずアンケート調査の回答データ数値を表に示した。全 11 問の調査結果は、本研究の 3 つの検討項目 A、B、C に該当する質問に分類した。A に関しては「オンライン授業を行う頻度はどの程度が望ましいか」の検討項目を、Q1、Q2 に分類した。B では「対面と比較したオンライン授業の学習効果」について、Q3、Q4、Q7、Q8、Q11 に分類した。C では「学生がどのような問題点を感じているのか」において、Q5、Q6、 Q9、Q10 に分類した。こ

れらを A、B、C の順にそれぞれを示していく。

４．１　分類 A

このセクションでは､｢オンライン授業を行う頻度はどの程度が望ましいか｣について Q1、Q2 の質問回答数値をまとめた（表 2、3）。

表 2．Q1　感染症リスクがある場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？

Q1	A. 0%	B. 10 – 30%	C. 40 – 60%	D. 70 – 90%	E. 100%	無回答
回答数（$N = 62$）	0	1	8	20	32	1

（出典　早稲田大学（2020）をもとに筆者作成）

表 2 に関しては、感染リスクがある場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切かについての学生の見解を示している。全ての英語授業をオンラインで実施することが適切だと回答している学生が全体の約 52%の 32 名と高い割合を示した。対面とオンライン授業の組み合わせが望ましいと回答した学生は全体の約 47%の 29 名になる。この 2 つの回答から、ほぼ全学生がオンライン英語授業の実施に合意していることが明らかになった。

表 3．Q2　感染症リスクがなくなった場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切だと思いますか？

Q2	A. 0%	B. 10 – 30%	C. 40 – 60%	D. 70 – 90%	E. 100%	無回答
回答数（$N = 62$）	15	13	15	13	5	1

（出典　早稲田大学（2020）をもとに筆者作成）

表 3 では、感染リスクがなくなった場合、オンライン英語授業の実施割合はどのくらいが適切かについての学生の見解を表している。感染リスクがなくなった場合でも全ての英語授業をオンラインで実施するべきだと回答している学生が 5 人で全体の約 8%いることが明らかになった。対面授業と組み合わせて、ある程度はオンライン授業を実施することが適切だと感じている学生も全体の約 66%41 名存在しており、COVID-19 収束後も、依然としてオンライン授業の導入を支持する学生数が多いことが明確になった。

４．２　分類Ｂ

ここでは、「オンライン英語授業の学習効果」の内容に関するＱ 3、4、7、8、11 の 5 つの質問の数値を表示した（表 4、5、6、7、8）。

表 4．Q3　オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて学習効果はありましたか？

Q3	A. 学習効果は上がった	B. 学習効果は下がった	C. 変わらない	無回答
回答数（$N = 62$）	11	12	38	1

（筆者作成）

表 4 では、オンライン英語授業は対面英語授業と比べて学習効果があったかについての見解を示している。オンライン英語授業で「学習効果は上がった」が全体の約 18％で 11 人、「学習効果は下がった」は約 19％の 12 人でともに 2 割弱であった。これに対して「変わらない」と回答した生徒は全体の約 61％38 人で、「学習効果は上がった」学生と合計すると、約 79％の学生がオンライン英語授業でも対面授業と同等かそれ以上の学習効果を得ることができたことが明確になった。

表 5．Q4　オンライン英語授業には、満足していますか？

Q4	A. 満足	B. 不満足	C. どちらでもない
回答数（$N = 62$）	41	5	16

（筆者作成）

表 5 に関しては、オンライン英語授業に満足しているかの意見をまとめた。3 段階評価と回答理由を自由記述してもらい、自由記述では 62 人中 41 人から貴重な意見を聞くことができた。「満足」と回答した生徒が 41 人で全体の約 66％に対して、「不満足」は 5 人の約 15％だった。全体的にオンライン英語授業の満足感は高いという結果である。この結果を自由記述の回答と総合する。その中から「満足」と回答した 27 人で特に多かった 10 人の意見としては、「しっかりと、対面と変わらず英語を学ぶことができたので、満足です」という回答など、オンライン授業が対面と比べてあまり変わらずに受講できたことに関する内容だった。その次に多かった 5 人の記述では、「他人に気を遣わずに集中して授業に取り組めるから」など、家で受講できる利便性が満足感につながったと回答している。その他、4 人からは「ブレイクアウトセッションでしっかりと自分の考えを伝えることができ、相手の考えを聞けた。」という記述や、「オンラインでも、しっかりコミュニケーションを取ることができるし、対面授業よりもリラックスしてできるから」という回答など、コミュニケーションがしっかり取

れたことへの意見があった。

「不満足」と回答した 5 人の意見の内容では、「リビングで受けているが、まれに親の仕事が休みになることがあり、その時はビデオを付けたくないと思っていたため、常にビデオをつけるのがつらかった」という記述など、このクラスではビデオをオンにすることを条件にしていたため抵抗を感じていた生徒も少数存在したことが明らかになった。

表 6．Q7　オンライン英語授業を続けられる理由はどんな点にありますか？

Q7	自宅で受講できる	通学時間がない	感染防止になる	その他	無回答
回答数（$N = 62$）	21	11	6	10	14

（出典　関・冨永・向後（2014）をもとに筆者作成）

表 6 では、オンライン英語授業を続けられる理由についての学生の見解を自由記述式で回答してもらった。コーディングにより共通する言葉や意味を抽出したところ、3 つのキーワード「自宅で受講できる」、「通学時間がない」、「感染防止になる」に関する回答が得られた。共通点がない回答に関しては「その他」に分類した。「家で授業が受けられる」の分類で回答した生徒が全体の 21 人で約 34%、「通学時間がない」は 11 人で約 18%だった。2 つの回答の合計が全体の約 52%と高い割合だった理由としては、「通学時間を有効活用できる」、「遅刻や欠席が減った」、「家でリラックスして気軽に受講できる」、「周りに人がいないので集中力が向上した」などの記述回答が見受けられた。「感染防止になる」では、6 人で全体の約 10%で、「飛沫による感染を防ぐことが出来る」、「電車すら乗ってないので感染リスクが格段に減ると感じます」などの内容が得られた。

表 7．Q8　オンライン英語授業の良い点と改善点を述べて下さい

Q8 良い点	自宅で授業が受けられる	通学時間がない	課題提出や資料入手が便利	感染防止になる	その他	無回答
回答数（$N = 62$）	23	15	5	4	7	8
改善点	インターネット環境	課題の量、提出方法	生徒や先生とのコミュニケーション	改善点なし	その他	無回答
回答数（$N = 62$）	17	5	5	3	11	21

（出典　早稲田大学（2020）をもとに筆者作成）

表 7 では、オンライン英語授業の良い点と改善点を述べてもらい見解を示した。Q7 と同様に共通する言葉や意味で分類したところ、「良い点」では 4 つの内容「自宅で授業が受けられる」、「通学時間がない」、「課題提出、資料入手が便利」、「感染防止になる」に分類することができた。共通点があまりない回答に関しては「その他」に分類した。その結果、この質問でも Q7 と同様の傾向が見られ、特に「自宅で授業が受けられる」、「通学時間がない」の分類で回答した生徒の合計は全体の 38 人で約 61％と高い割合だった。Q7 と同様の答えが見られ理由としては、Q7 の「オンライン英語授業を続けられる理由」と Q8 の「オンライン英語授業の良い点」の質問内容が、学生にとって同様に受け止められたことが回答から明らかになった。「オンラインで課題提出や資料入手が便利」に関しては、5 人で 8％の回答があった。これは、全ての課題提出や資料入手をオンラインで行ったことが一部の学生にとってプラスに働いている。

「改善点」に関しては、分類の結果 3 つの内容「インターネット環境」、「課題の量、提出方法」、「先生、生徒とのコミュニケーション」に分類できた。多数回答があったのは、「インターネット環境」の改善についてで、全体の 17 人で約 27％だった。実際の回答を見ると「音声が乱れる、ラグがある」、「通信状態によっては話を聞き逃してしまうことがある」など、インターネットの通信環境による不具合で、聞きづらい、話しづらいなどの状況から授業になんらかの支障をきたしている生徒がいることが明確になった。通信環境は生徒のインターネット契約状況によりさまざまであり、通信状態の悪い生徒は、授業中に接続が頻繁に切れてしまい、再び入室するのに時間がかかる場合も多々見受けられた。「課題の量、提出方法」についての改善点が全体の 5 人で約 8％だった。生徒の学びの進捗状況をより把握するために、オンライン授業では通常の対面授業よりも課題数が多く、全てをオンラインで提出してもらった。「どの授業でも課題が多い」、「もう少し、操作方法などが簡易的になってほしい」などの回答から、生徒によっては課題の量や、提出方法に負担を感じていたことが明確になった。「生徒や先生とのコミュニケーション」では、5 人約 8％は改善が必要だと回答があった。「コミュニケーションがあまりとれていなかった」、「質問しにくい」、「孤独感をすごく感じる」などの回答があり、クラスメートや先生と接する機会がないため、気軽に話しかけられないことが生徒のコミュニケーション不足、不満、精神的負担につながっていることが明らかになった。

表 8．Q11　各項目から、最も当てはまるものを一つ選んでください

オンライン授業により、英語を（話す力、聞く力、文法力、語彙力、発音力）が伸びた。

Q11 回答数（$N = 62$）	まったくそう思わない	ややそう思わない	どちらともいえない	ややそう思う	強くそう思う	無回答
話す力	1	7	25	19	7	3
聞く力	1	8	13	25	12	3
文法力	2	9	23	17	8	3
語彙力	2	10	24	19	3	4
発音力	2	11	29	12	5	3

（筆者作成）

表 8 に関しては、オンライン授業により、英語の（話す力、聞く力、文法力、語彙力、発音力）が伸びたか当てはまる回答を選択してもらい統計をまとめた。その中で、「聞く力」が伸びたと回答した学生が最も多く、「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が 37 人で、約 60%の学生がこのように感じていたことが明らかになった。対面ではお互いの表情から相手の気持ちを判断しやすいが、オンラインではそれが難しいところがある。そのため、学生はペア・グループワークでは、お互いの理解を確かめ合う様子が対面授業よりも多く伺えた。

2 番目に回答数が多かったのは、「話す力」が伸びたと回答した学生であった。「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が 26 人で、約 42%の学生がこのように感じていたと回答している。オンライン英会話授業で重視した点の一つとして、オンラインでも英会話の練習が少しでも多くできるよう、ブレークアウトセッションによるペアワークやグループワークをできる限り多く活用した。これにより、学生からは、「ブレイクアウトルームでしっかりと自分の考えを伝えることができ、相手の考えを聞けた」や「初対面のペアともうまくコミュニケーションをとれた」などの意見があり、ペアワークやグループワークでコミュニケーションが取れた事が、「話す力」が伸びたことにつながったと推測される。

「文法力」も、「話す力」とほぼ同等の伸び率を示している。「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が 25 人で、約 40%の学生がこのように感じていると回答している。ブレークアウトセッションでペア・グループワークを行う際に、各セッションをまわり、できる限り学生一人ひとりに会話内での文法の誤りを修正した。このことが文法力の向上に直結したと考えられる。

４．３　分類 C

ここでは、「オンライン授業の問題点」に関する Q5、Q6、Q9、Q10 の質問の数値をまとめた（表 9、10、11、12）。

表 9．Q5　オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はありましたか？

Q5	A. 負担が増えた	B. 負担が減った	C. 変わらない	無回答
回答数（$N = 62$）	4	25	31	2

（筆者作成）

表 9 に関しては、オンライン英語授業は、対面英語授業と比べて身体的、精神的負担に変化はあったかの回答を示した。3 段階評価と回答理由を自由記述してもらい、自由記述は 62 人中 39 人から意見を聞くことができた。「負担が増えた」と回答した学生が 4 名で全体の 6% に対して、「負担が減った」が 25 人で全体の約 40%だった。「負担が減った」と「変わらない」の 2 つを合計すると全体の約 90%であり、大多数の学生は、身体的、精神的負担が減ったか、あまり変化を感じなかったと回答している。負担が減ったと感じる生徒では、「通学しなくて良いという点ではかなり楽だと思う」など、多くの学生は通学時間がなくなったことで肉体的負担が軽減されたと記述回答している。中には「自分は、通学に往復 4 時間ほどかかるため、通学がないことはとても楽でした」など、学生にとって一日の通学時間が肉体的、精神的に大きな負担になっていた事が明らかになった。負担が増えたと感じる学生では、「わからなくなった場合、近くの友達や先生にすぐ聞くことができない」、「オンライン授業だと家の背景が映りそうでなんかプライバシー問題が気になる」などの記述回答があり、学生同士や先生とのコミュニケーションの機会が減ったことや、自宅のプライバシーが露出してしまうところなどが精神的な負担になっていることが明確になった。

表 10．Q6　オンライン英語授業を受ける上で、困難と感じた点はどのようなことですか？どのように困難を乗り越えますか？

Q6	インターネット環境	生徒や先生とのコミュニケーション	特になし	その他	無回答
回答数（$N = 62$）	18	16	4	13	11

（出典　関・冨永・向後（2014）をもとに筆者作成）

表 10 では、オンライン英語授業を受ける上で困難と感じた点や、どのように困難を乗り越えるかについての回答を示した。回答を記述式で受け取り、その回答内容をコーディングシステムにより共通するキーワードを探し出して分類したところ、3 つの内容「インターネット環境」「生徒や先生とのコミュニケーション」「特になし」に分類することができた。その中で一番多かった記述が、「インターネット環境」による接続トラブルで、全体の 18 名 29% の回答があった。その困難をどのように解決したかについては、「回線の種類を変えて解決し

た」、「チャットで質問して解決した」など、各自が工夫をしてこの困難を乗り越えようとする姿勢が見受けられた。その反面、どうすることもできず、解決策が見当たらないまま授業が終了してしまった生徒もいた。

その次に多かった記述が、「生徒や先生とのコミュニケーション」が困難だという回答が、全体の 16 名 26%あった。その困難をどのように解決したかについては、「メールのやり取りをして乗り越えました」、「対策は連絡先の交換」、「LINE する」など、学生同士で連絡先を交換して情報の共有を行っていたことに触れている記述が多く見受けられた。これは、筆者がペアワークの際は可能であれば学生同士で連絡先を交換することを勧めていた事も要因の一つである。理由としては、何かわからない事があったときに先生よりも学生同士の方が質問しやすいことや、学生による課題提出内容の思い違いなどによる誤提出や未提出を防ぐことができると推測したからだ。

表 11. Q9　オンラインで英語を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはありますか？

Q9	A. そう思う	B. ややそう思う	C. どちらでもない	D. あまりそう思わない	E. そう思わない	無回答
回答数（$N = 62$）	5	14	8	11	21	3

（筆者作成）

表 11 に関しては、オンラインで英語を学習することで、孤立感、不安、相談相手がいないと感じたことはあるかについての回答を表した。5 段階評価と自由記述による貴重な意見を聞くことができた。その中でも、最も多い回答「そう思わない」が全体の 21 名で約 34%だった。「そう思わない」と「あまりそう思わない」を合計すると、全体の約 52%になる。その次に多い回答「ややそう思う」が全体の 14 名で約 23%。「ややそう思う」と「そう思う」を合計すると、全体の約 31%となる。孤立感、不安、相談相手がいないと感じている約 3 割の学生の自由記述では、「わからないときにすぐに聞けない」、「気軽に近くの人に話しかけられない」などの回答が多く見られた。対面授業に比べて周りの学生に話しかけられないことや、話しかけられないために新しい友達ができないことが要因になっている。孤立感、不安、相談相手がいないと感じない約 5 割の学生の自由記述では、「仲の良い子が同じグループや同じ講義を受けているから」などの記述が多数見られ、すでに友達がいた生徒は、互いに連絡を取り合い相談することにより不安や孤立感を解消していたことが明確になった。その他、ブレークアウトセッションでのペアワークにより、他の学生との会話ができたことで問題を解消できたという回答が得られた。

表 12. Q10　オンライン授業でわからないことがあるとき、あなたはどうしますか？

Q10	A. 先生に質問する	B. 身近な人に質問する	C. 放置する	D. わかるのを待つ	E. 自分で解決する
回答数（N＝62）	19	30	0	1	12

（出典　石川・向後（2017）をもとに筆者作成）

表 12 では、オンライン授業でわからないことがあるときにどうするかについての学生の見解を示した。Q9 と同様に 5 段階評価と自由記述によりその理由を聞くことができた。一番多い回答「身近な人に質問する」が全体の 48%である。自由記述によるその理由として最も多かった回答が、「聞きやすいから」など身近な人で特に友達には気軽で簡単に聞けるという意見があった。次に多い回答「先生に質問する」が全体の 31%になる。自由記述からその理由を見ると、「最も正確」、「一番早い」などの回答が得られた。短時間で確実に答えを得ることができる合理性を重視していることが理由だと推測される。

５．考　察

本研究は、オンライン英語授業を受講する大学生にアンケート調査を実施し、オンライン英語授業の学習効果と問題点について回答をまとめたものである。学生の回答から、以下の 3 項目が明確になった。

1. **オンライン英語授業実施率**：学生の多くが感染リスクに関しては強い警戒感を持っているが、オンライン授業の実施に対しては全体的に学生の理解を得ていることが明確になった。さらに、COVID-19 収束後も多くの学生がオンライン授業の継続を望んでいることから、オンライン授業を経験したことで、自宅で受講できる手軽さや、通学時間がなくなり自由時間が増えた事などのメリットに気づき、それが今後のオンライ授業継続希望にプラスに作用したと推測される。

2. **学習効果**：8 割近くの学生がオンライン英語授業でも対面授業と同等かそれ以上の学習効果が得られるという結果から、今後も十分な学習効果が期待できると推測される。ブレークアウトセッションも有効に活用できたことが認められた。授業では頻繁にブレークアウトセッションを活用して、ランダムに選んだ学生同士でペア・グループワークを行い、クラスメート同士のコミュニケーションを図った。その際、できる限り各セッションをまわり学生から質問を受け、学生に指導を行うなど指導者と学生のコミュニケーションを図った。これにより、クラスメート同士や先生とのコミュニケーションが深まったことや、対面よりリラックスして相手と話せる点などが孤立感やコミュニケーション不足の解消に役立つことが明らかになった。もう一点触れるべき項目として、「聞く力」が伸びたと回答した学生が最も多かっ

たことだ。これは、以前と比べて分からないことを授業中に気軽に隣席のクラスメートや先生に質問できないなど、コミュニケーションが制限されたことで、授業内容を理解しようと学生自身がより聞くことに集中したため「聞く力」の向上につながったと推測される。

3. **問題点 :** インターネット接続の不具合により授業に影響があった学生が多く見受けられた。このことから、今後は大学のサポートや学生自身のネット環境改善など、早急な通信環境整備の向上が求められていることが明確になった。それに伴い、さらなる大学側の通信システム操作方法のサポート強化も必要と推測される。コミュニケーション不足を指摘する学生も見受けられたことから、学生同士や教師との会話を増やすことが必要である。特に、ペア・グループワークの際は、教師が積極的に学生同士で連絡先を交換するよう伝えることで、コミュニケーション不足、不安、孤立感を解消することに役立ったと考えられることから、今後はより多くの教員が学生同士の連絡先を交換できるよう強く勧めたい。毎回ビデオ・オンを義務つけることに対してストレスを感じる学生がいることも明確になり、今後はビデオのオン・オフを柔軟に対応することが必要になってくると考えられる。課題の量が多いという指摘に対しても、学生の身体的、精神的負担を軽減できるような工夫が必要だ。

６．結論と今後の課題

本研究を通して、オンライン英語授業実施による効果と問題点が明らかになったことから、大学や指導者が今後どのように対応していくかが直近の課題になるだろう。

さまざまな効果が見えてきた中で、今後は、従来の対面式授業のみならず、対面式とオンライン授業を組み合わせることにより、より効果的で満足度の高い授業の提供が可能になると考えられる。授業内では、ブレークアウトセッションの活用を増やすことでコミュニケーション不足を解消できると推測される。特筆すべきは、リスニングに対する学習効果の向上である。対面にはないオンライン授業の学習効果として、カリキュラムや指導を適切に構築することにより、今後のさらなる学習効果が期待できる。

最後に、オンライン英語授業の問題点について言及したい。第一に、全学生が一定したインターネット接続環境を使用できるよう、大学側による Wi-Fi 環境の整備や機材貸し出しなどのサポートをより充実させることは、今後の大きな検討課題であると考える。コミュニケーション不足の改善策としてはブレークアウトセッションによるペア・グループワークの活用頻度を増やす事や、チャット機能などの有効活用によりわからないことがあれば授業中でもすぐに質問できる環境を整えることが重要だと考える。クラス版ソーシャルプラットフォームのような、先生を含めた学生同士が気軽に質問や発言できるバーチャルな場を提供することもコミュニケーション不足に役立つと推測される。課題が多いことについては、ある程度は小テストなどを授業中に行うことで提出物の量を調整することが可能だろう。ただ、他のクラスでも同様に課題の量について問題が起きている可能性も考えられるので、教師間で課

題量の情報交換を行い、調整や工夫をすることで学生の負担を減らすことも可能だと考える。

このように、今後の日本のオンライン英語教育は、さまざまな問題点の解決や学生の不満を解消しつつ、学習効果を伸ばしていくことが重要だ。ハードウェアやソフトウェアなどコンピューターシステムを接続するインターフェースなどの外的要因だけでなく、学生のストレスや様々な精神的負担を軽減する内的サポートの両面から改善していく必要がある。そのためには、大学や教師がこれまで以上に講義内容を向上させる工夫が不可欠になり、学生側も負担を減らすために自己管理意識のレベルを向上させる工夫が必要である。

なお、本研究の対象は、学生数が 1 クラス 30 人前後の双方向型授業を対象にしたケーススタディーである。したがって、これより小規模型もしくは大規模型授業や、一方向型授業などに対象を広げて検討することは今後の課題である。

【参考文献】

Dafydd, M. & Hyoungjoo, L. (2021). How do students perceive face-to-face/blended learning as a result of the COVID -19 pandemic? *The International Journal of Management Education, 19*(3), doi.org/10.1016/j.ijme.2021.100552

Gillett-Swan, J. (2017). The challenges of online learning supporting and engaging the isolated learner. *Journal of Learning Design, 10*(1), 20-30.

Mahmoud, M. & Mohammad, A. (2021). Evaluation online learning of undergraduate students under lockdown amidst COVID-19 Pandemic: The online learning experience and students' satisfaction. *Children and Youth Services Review, Vol.128,* doi.org/10.1016/j.childyouth.2021.106160

Odriozola-González, P., Planchuelo-Gómez, A., Irurtia, M.J., & De Luis-García, R. (2020). Psychological effects of the COVID-19 out break and lockdown among students and workers of a Spanish university. *Psychiatry Research, Vol.290*, doi.org/10.1016/j.psychres.2020.113108

Patricia, A. (2020). College students' use and acceptance of emergency online learning due to COVID-19. *International Journal of Education Research Open, Vol.1,* doi.org/10.1016/j.ijedro.2020.100011

Rizun, M. & Strzelecki, A. (2020). Students' acceptance of the COVID-19 impact on shifting higher education to distance learning in Poland. *International Journal of Environmental Research and Public Health, 17*(18), 1-19.

Tee, L. M., Tee, A. Cherica., Anlacan, P. Joseph., Aligam, Joy G. Katrina., Reyes, Wincy C. Patrick., Kuruchittham, Vipat., & Ho, C. Roger. (2020). Psychological impact of COVID-19 pandemic in the Philippines. *Journal of Affective Disorders, Vol.277,* 379-391 doi.org/10.1016/j.jad.2020.08.043

Zhang,W., Wang,Y., Yang, L., & Wang, C. (2020). The psychological impact of the COVID-19 epidemic on college students in China. *Psychiatry Research, Vol.287,* doi.org/10.1016/j.psychres.2020.112934.

石川奈保子・向後千春（2017）「オンライン大学で学ぶ学生の自己調整学習方略およびつまずき対処法略」『日本教育工学会論文誌』41（4）：329−343.

関和子・冨永敦子・向後千春（2014）「オンライン大学を卒業した社会人学生の回顧と展望に関する調査」『日本教育工学会論文誌』38（2）：101-112.

田浦健次朗・明比英高・秋田英範・郡司彩・工藤知宏・空閑洋平・栗田佳代子・黒田裕文・三浦紗江・中村文隆・中村宏・小川剛史・岡田和也・坂口菊恵・関谷貴之・柴山悦哉・玉造潤史・友西大・椿本弥生・Diego Tavares Vasques・吉田塁（2020）「東京大学におけるオンライン授業の始まりと展望」『コンピュータソフトウェア』37（3）：2-8.

ウェブ検索：

U.S. Department of Education (2010). Evaluation of Evidence-Based Practiced in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies. 1-66. https://www2.ed.gov/rschstat/eval/tech/evidence-based-practices/finalreport.pdf （2020 年 12 月 29 日閲覧）

文部科学省（2020）「大学等における新型コロナウィルス感染症への対応状況について」https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf（2020 年 12 月 29 日閲覧）

文部科学省（2021）「新型コロナウィルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01- 000004520_1.pdf（2021 年 6 月 30 日閲覧）

早稲田大学（2020）「オンライン授業に関する調査結果（2020 年度春学期）」https://www.waseda.jp/top/news/70555（2020 年 12 月 29 日閲覧）

Questionnaire Analysis of Learning Effects and Problems During Online English Classes:
Focusing on the Second, Third, and Fourth-year Students in Speaking Classes

Jiro Watanabe

Abstract

In recent years, with the introduction of online learning, the teaching format of English education has undergone major changes. This study explored university students' perception of learning effects and problems during online English classes that started in the fall semester of 2020. A questionnaire survey was conducted of 62 second-, third-, and fourth-year university students. As a result, seven learning effects and problems were clarified: (1) online class implementation rate, (2) breakout session validity, (3) Learning Effect, (4) Improved listening skills, (5) internet connection problem, (6) lack of communication, (7) excessive amount of homework. These findings present the future possibilities and prospects that can be considered to improve online English classes in the future.